

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	地理学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・史学科、教授	丸山 浩明 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	村神信仰から見るインド民俗宗教の実相—ディー・バーバーを巡る呪術実践を事例として		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・地理学専攻 博士課程後期課程5年	小松原 秀信 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	同上	小松原 秀信	
研究期間	2008 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

インド社会における宗教の実相を理解しようとする際、全人口の七割以上を占める村落社会の人々の信仰世界がどのようなものであるかを明らかにすることは不可欠の課題である。とりわけインド民俗宗教の次元において、村神への信仰は村人の日常生活に深く根ざしている。それらの信仰実践は、教理中心主義的（ブラーマン中心主義的）なヒンドゥー教とは一線を画す。そのため、呪術実践を含む村人たちの村神への信仰の様相を微視的に研究することで、ブラーマン中心主義的なインド理解を転倒させるような、インド民俗宗教の実相を明らかにすることができる。こうした問題意識を背景として、本研究では、ワーラーナシーにおいて最も特異な村神といえるディー・バーバーを巡る村人の信仰実践に関する民族誌学的調査を実施する。その調査成果を踏まえ、インド村落社会に生きる人々の信仰世界をその底辺から理解することが本研究の目的である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 境界の守護神 } { 旧「不可触民」 } { インド民俗宗教 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

インド社会、とりわけ村落社会に生きる人々の日常的宗教実践において、村落内の小祠に祀られる村神への信仰はその中核的行為である。これら村神は、研究者によって、シヴァやヴィシュヌといった「正統ヒンドゥー教」的方向性(サンスクリット經典に基づく宗教伝統)をもったヒンドゥーの大神と、非典籍的でより地域的な色彩の強い「民俗神」とに大別される。しかし、サンスクリット經典に基づく教理主義的な宗教伝統こそが正統なるヒンドゥー教であるとするインド文献学者たちによって、村落レベルのローカルな神格とそれを巡る村人たちの宗教実践は異端として退けられてきた。このようなヒンドゥー教理解は、浄・不浄イデオロギーによって貫かれた、ブラーマン(司祭カースト)を頂点とする「階層的カースト社会としてのインド」という認識を支持する一義的な「上からの解釈」といえる。だが、このようなブラーマン中心主義的な視座からではヒンドゥー教のオーソドキシシーのみを捉えることとなり、実際に村人たちの日々の暮らしを底辺から支えている、生活宗教としてのヒンドゥー教の実相が見えてこない。

このような問題意識に基づき、本研究では、北インド、U.P.州ワラーナシー県の村落社会におけるディー・バーバーという村神への信仰を通して、インド村落社会に生きる人々の信仰世界をその底辺から理解することが本研究の目的である。

ディー・バーバーとは村の境界を守る神であり、村人の生活に豊穰をもたらし個々人の願望を叶え、また村の中で起こる災厄の一切を取り仕切っているとされる両義的な民俗神である。「ディー」という名は「小高い山」や「土塁」を意味する語彙「ディーハー」に由来するともいわれ、それは逐語的に「居住地」あるいは「村」さらには「祖先の居住地」という意味をも併せ持つ[Coccarri 1986: 67-68]。ワラーナシー県では村ごとにディー・バーバーの祠が一つずつあるのだが、興味深いのは、その祠が「小さき人々(チョーデー・ローグ)」と蔑称で呼ばれる低カーストや旧「不可触民」居住区に建てられているという点である。

一般に、村落部におけるディー・バーバーの祠は「ピンディー」と呼ばれる円錐状の本尊が信仰対象として祠に祀られ、その祠は多くの場合に周囲を囲う壁をもたない開かれた建築構造になっている。寺院の日常的な管理はディー・バーバーの祠の周辺に住む旧「不可触民」の人びとが行っており、毎朝、ダールの灌頂が捧げられている。旧「不可触民」の人びとにとっては、ディー・バーバーの祠は一種の「社交場」のような空間にもなっていて、またディー・バーバーが彼らにとってのカースト・レヴェルでのアイデンティティの拠りどころにもなっている。

だが、このことは必ずしもディー・バーバーが旧「不可触民」の人びとのみ崇拝されている神であるということの意味していない。むしろ、ディー・バーバーは司祭カーストであるブラーマンなど上位カーストを含む、すべての村人から「村の王」という意味の「ガーオン・カー・ラージャ」と呼ばれて信仰されている。また、「村神」の総称である「ガーオン・カー・デオター」は、狭義にはディー・バーバーのことを指す。その意味で、ディー・バーバーは村の「鎮守」としての役割を担っている。

ディー・バーバーが村あるいは村人に対して保持している重要性は、単に村人たちの言説のみによって表現されるものではなく、それは村内の年中行事や通過儀礼における村人たちの宗教実践にも顕れている。たとえば、毎年カールッティカ(10月~11月)の新月の日に行われるディーワリー祭の折には、上位カーストの人びとも小さな土器のランプを片手に旧「不可触民」の居住地を訪れて、ディー・バーバーに礼拝を捧げるのが習わしとなっている。また、村の中で婚姻が行われる際には、カーストの相違に関わらず新郎新婦がディー・バーバーの祠を訪れて、新婦の入村許可を得るための礼拝を捧げる必要がある。さらに、祖霊をビハール州の聖地ガヤーに送り届けるガヤー・シュラッタダという祖先供養の際にも、シュラッタダを行う人物がガヤーに向かう際に、祖霊の靈魂を象徴するココナッツを携えてディー・バーバーの祠を訪れて礼拝を捧げることが必要となる。これはディー・バーバーが「村の王」というだけでなく、死霊の世界をも統括しているとされるためである。そのためディー・バーバーは、村の境界を守護することで村内に災厄が及ぶのを防ぐと同時に、村内のあらゆる災厄をも引き起こす悪霊の神としての顔ももってい

研究成果の概要 つづき

る。すなわち、ディー・バーバーの存在が B 村の人々の超自然的災厄に関する想像力の結節点となっており、村人たちの呪術実践の中軸にディー・バーバーを巡る信仰があることがわかる。

ディー・バーバーは、ときに災厄をもたらすほどの強大な呪力を有しているために「覚醒している神」と考えられている。そのため村人たちは除災招福のためにディー・バーバーに誓願する。また、それぞれの満願の際には、ディー・バーバーに供物を捧げて返礼することが重要な信仰実践となっていて、大麻や酒などが捧げられる。しかし、ディー・バーバーに対する最も重要な供物は、動物供犠による生贄の血である。

動物供犠はヴェーダ聖典にも説かれているようなインド古来の宗教儀礼の一つであるが、今日のインド社会では、とくに上位カーストを中心にそれを「血生臭い」「野蛮」な行為と見なす傾向がある。だが、ディー・バーバーなどの「覚醒している神」に対して、動物供犠は欠くことのできない重要な信仰実践でもある。そのため、個々人の家の前や人目につかないところで、ディー・バーバーへの供犠を秘匿的に行おうとする者も多い。

このように、旧「不可触民」であるチャマールの居住区に祀られる村の境界を守護するディー・バーバーは、村人たちの生活世界においては、絶大な力を有する「村の王」とされ、篤い信仰を獲得している。あるブラーマン男性が報告者に語った次の言葉は、村人たちの信仰世界におけるディー・バーバーのアンビヴァレントな位置づけを端的に物語っている。すなわち、ディー・バーバーとは「村で最も低位の神であり、最も偉大な神である」。

以上見てきたディー・バーバーの特徴を、「正統ヒンドゥー教」の特色を体現しているといえるシヴァと比較すると、そのコントラストは歴然としている。シヴァ寺院が B 村の「中心」ともいえる居住区に建ち、その主神シヴァはブラーマン司祭による聖水や牛乳の灌頂を受け、動物供犠を不浄として忌避する。一方、ディー・バーバーの祠は旧「不可触民」の居住区に建てられ、呪医や霊媒師といった非ブラーマン司祭による動物供犠が実践される。このコントラストは、次のように言い換える事ができる。外部に対して閉ざされた造りになっているシヴァ寺院が、旧「不可触民」を不浄なる存在として排することで村の信仰世界の中心性を創り出しているに対し、より開かれた構造をもった祠に祀られるディー・バーバーは村境にあって災厄の侵入を防ぎ、あるいはそれを管理することで村の境界を維持し、「場所の神」として村の空間性とも結びついている。すなわち、両宗教施設が有するこれらの対称的な特徴は、B 村の村人たちの信仰世界における「中心」と「周縁」というコントラストとして縮約することができるだろう。

それでは、「村で最も低位であり、最も偉大な神である」というディー・バーバーに対する村人たちの矛盾に満ちた認識をわれわれはどのように捉えるべきであるのか。おそらく、それは以下のような推論が可能である。民俗神として古くから信仰されていた、村を境界づけている神ディー・バーバーが、「正統ヒンドゥー教」的尺度からの解釈化が進むことによって、それは「正統ヒンドゥー教」の神格パントオンの中では低位に位置づけられる。しかしその一方で、B 村の村人たちの生活世界においては、ディー・バーバーが担っている重要性を完全に放棄してしまうわけにはいかず、今日でも「村の王」として村落社会の中で君臨し、村人たちの生活を守護し続けている。すなわち、ディー・バーバーを巡る信仰実践は、ブラーマンを頂点とする「正統ヒンドゥー教」的な解釈と、村人たちの生活世界を底辺から支えている「民衆ヒンドゥー教」的解釈との狭間で展開されている信仰実践といえる（実体のある二つの宗教文化が平行して存在しているという意味ではなく、ディー・バーバーの祠に対する、イデオロギーの相違による「解釈」、あるいは「態度」の違いである）。そのように考えると、ディー・バーバーの祠は「正統ヒンドゥー教」的解釈と「民衆ヒンドゥー教」的な解釈という「異なるイデオロギーによる意味づけの闘争の場」[関根 1995 : 173]としての境界に立っていると考える事ができる。